

その書写作業の完了と同時にそのカードの全部を私の利用に供して下さった。それとほとんど時を同じくして、ボードレイ文庫蔵日葡辞書のロートグラフの完本が私の手に入るという、全く思いもかけなかった幸運に恵まれるということもあって、そこに運命のようなものを感じた私は、勇を鼓してその研究に取組む心を固めたのである。その時思ったことは、自らの能力をはかり、この一書の研究に専念しようということであった。この書はそれに価するものであり、ねばり強く取組んでいけば、難物のこの書もいつかは胸を開いてくれるはずだと思ったからである。

日葡辞書は、元来キリスト教伝道上の必要から編まれたもので、その理解のためには、当時の歴史的事情・布教事情からキリシタン資料一般を知らねばならず、同時代の国内文献もゆるがせにすることはできない。また、日葡辞書には、早く1620年マニラ版のスペイン語訳があり、1868年パリ版のフランス語訳があるので、それらも参照する必要がある。もともと外国語は苦手であるのに、それらを参照するとなれば、全く泥縄式の勉強もしなければならなかった。ともかくも牛歩遅々とした歩みであったけれど、長年の間ひたすら付き合ったよしみで、日葡辞書も理解を拒む手を少しはゆるめてくれたようである。拙いながら少しばかりのリポートができ、日本語訳の稿本もできた。今それを恩師の批正を仰ぎ、その他の方とも協力して出版するめどもついたが、まだ印刷の運びに至らずに退官することになった。退官の時をひとくぎりに、心を新たにしてその完成

と研究の深化につとめなければならぬと考えている。

世に「馬鹿の一つ覚え」ということわざがある。私はこの非難を甘受すべき人間であり、始めからその覚悟である。というのは、当の私自身があえて一つ覚えに徹しようとしたのだから。力劣り、才薄く生まれついた自分には、それよりほかに歩む道はないと考えたからである。しかし、当面の対象は狭く限っても、それに迫ろうとすれば、考究の範囲はおのずから広がらざるを得ない。私の歩みは、前にも述べたように泥縄式であって正道ではない。必要に迫られて仕方なくそうせざるを得なかったのである。日葡辞書に出会うまでの営みは、結果からみれば草案をくったようなものである。しかし、今にして思えば、決して徒勞であったとは思わない。朝鮮の日本語資料を手がけたことも、日葡辞書研究の上に役立つことが少なくはなかった。私が暗中摸索の悩みを続けているところ、ある畏敬する先輩から、「学問の世界には、めったに無駄ということはないものだ」と励まされたが、今にしてその真なることをつくづく思うのである。

年頭の所感が、つまらぬ自己の歩みを回顧することになってしまった。これも近く退官する思いがさせたわざとしてお許し願いたい。が、学生諸君にとって、踏まずに通るべき「前車の轍」として受けとってもらえば幸いである。

(日本研究 教授)

## 惜別のスケッチ

中井正文

ある人間が、そのひとなりに生きてきた人生にいいよ最後のな終止符を打たれようとするとき、過去に体験して集積した、さまざまな事象の記憶のあれこれが潜在意識の底からよみがえって、なんの脈絡もなしに、それこそフラッシュ・バックみたいに心のスクリーンに明滅するものらしい。すると、自分の場合も、定年というものを目の前にひかえて、世間なみに、これから第二の人生がはじまる、と自称し、他称されることが許されるなら、このきつ

けに第一の人生を清算してみるつもりで、自分なりの色あせた、みすばらしい過去をふり返ってみることは、まったくの不法・無意味でもないような気がする。

……ひとりの少年が、宮島の対岸の、瀬戸内海の岸辺の村で育った。彼は広島市内の中学校にはいる。そこは質実剛健の伝統を誇示する、およそ紀律の厳格すぎる学校だったが、少数の同好の友人たちといっしょに、彼は文学書をひそかに貸し借りして愛読

するようになった。あの時代のことが、いまさら昔なつかしく思い出される。

旧制の高校は、自分ひとりの意志で熊本の五高をえらんだが、けっきょく、後悔しなかった。早くも安酒を飲み、寮歌を高歌放吟することをおぼえた。ひとつ自分でも作ってみたくなくて、「椿花咲く南国の」という歌詞をでっちあげて、正式の寮歌として制定された。逍遙歌ふうの作曲の方がよかったせいか、いまだに生きながらえて、老若男女に愛唱されているそうである。サッカーが好きで、ひととおり選手としての活躍をつづけながら、年に四回も発行されていた、文芸部の雑誌「龍南」に毎号かかさずに小説や、随想らしいものを発表して、ひとりで悦にいらしていたらしいおもむきがある。とにかく、甘いロマンスの味のする、無邪気で思いあがりの、傷つきやすい青春の陶酔の、ある意味では短かすぎる三年間だったといえよう。(べつに留年はしなかった)

大学は、東京へ行った。そのころはたいへんに就職難の、暗い世相の時代だった。大学を出てから世間普通のコースに割りこむ気はなくて、若い彼は不遜にも苦節十年の、危険の予想される作家の道をとどる決心をしていた。希望のとぼしい文学青年として、彼はいくつかの同人誌に習作をかきつけた。どれもこれも力量のたりない、若書きの未熟なものにすぎなかっただろう。ときどき絶望的な、みじめな気分が悩まされた。大学を卒業して二年目に、ある総合雑誌(「中央公論」)が小説と、評論の募集をしたので、とびついて彼も応募してみたのだが、まったく意外なことに「神話」という、百枚たらずの小説が当選してしまった。(この雑誌には、のちに「阿蘇活火山」という青春小説をのせてもらった)

そのような小さな転回点があったので、最初の短篇集も出版されるし、ほかの雑誌からも小説や、翻訳などの依頼がきて、どうやら自活することも不可能ではなさそうな胸のときめきをおぼえたものだった。たとえ非力な新米作家でも、ひとたびスタートをきった以上、あとは自分自身の意志と、精進と、運命の風の吹きようを心の柱にして、粘りづよく初志をつらぬこうとやってみるしかないではないか。だが、あのときは、ひとつの挫折だった。あれもこれも戦争のせいにする気はないのだが、文学的な出版活動は停止され、雑誌は軒なみに休刊させられた。

彼は郷里に舞いもどって、ある私立女学校の教師になり、そののちに広島大学教養部の一員に迎えら

れたのだが、あれから早いものでもう二十五年、いま定年で学園をはずかに去っていかうとしている。その間にはいろいろなことがあったから、さまざまな感慨もなくなはないだろう。ほんとうに、その長い歳月に彼は何をしてきたのか? べつにたいして何もしてこなかったように反省される。トーマス・マン流の表現をひねって言うなら、ついに彼は学問的な秩序の聖域のなかへ「迷いこんだ」文学青年(?)にすぎなかったかもしれないのだ。教室で学生諸君におしえるとき以外は、あまり目だたない、中途はんばで役立たずの、まずは凡庸な教官であることの方がずっと多かったように思われて、みずから苦笑さえ浮かんでくる。

第一の人生の半分に近い、長すぎる期間に、いつまでも文学青年的な彼は何をやってきたのか? ろくな研究はしなかったようだし、小説はいくつも書いていたのだが、あまり変わりばえのしない、本人にとっても不満足なものが多かったようである。そのくせ、文学への情熱だけはもちつづけているらしいのだ。ただひとつ彼のためにせめて無用の提灯もちをしてやるなら、学生時代から作品をつうじてフランツ・カフカの文学に親しみ、戦後に世界的なカフカ・ブームが湧きおこったとき、ある世界文学全集のために長篇の「アメリカ」や中篇の「変身」などを翻訳し、ある文庫(角川)にもおさめられて、毎年かなり多くの新読者を得てきたことくらいのものでらう。

(外国語 教授)

## 総合科学部と旧制広島高等学校同窓会について ( 広島大学総合科学部報 № 3 ) の所感

( 広高同窓会 ) 瀬 良 文 夫

戦後の科学、技術の進展は、まことに目覚ましいものがあつた。人間がそれについて行き、またそれをさらに押し進めて行くためには、数多くの専門家が必要であつた。そのことがさらに専門分化に拍車をかけた。

各方面でこれら余りにも分化した専門分野間の調整、統合化の必要が痛感されるようになった。従つてそういうことのできる人への待望が深まってきた。このことが大学紛争をきっかけに生れた大学制度特に教養部制度の再検討の要請と相俟つて、旧制高等学校制度の見直しがいわれ始めた要因ではないのだろうか。そのような背景があつて総合科学部が誕生したのではないのだろうか。突如として生れたものであつてもそれを生む母胎は十分成熟していたのではないだろうか。この点筆者のいわれる「数年来の政府・文部省・財界の旧制高等学校見直し論」の通りであるが、見直し論はいかにも悪であるかのような見方はどうであろうか。世の中が必要とする人材を養成し、そのために過去の制度によいものがあれば取り入れることが何故悪いのであろうか。

その総合科学部がたまたま広島大学にできたので「広島高等学校」という具体的な対象が浮んだだけで何も「広島」にこだわる必要はないが、その広高についても戦時体制は学校の在り方を変えたことは確かである。しかし筆者のいわれるような「戦前の歴史的背景の中で広高の伝統と精神とは育った」ものではない。全く影響がなかったとはいえないが、そのような背景には反抗または無視の態度をとる者が大勢であつた。「さきの歴史を語ることをせず」はその結果でもあろう。

「昭和20年までの過程を、政府・地方官庁・企業・財界・大学等の中で担つた『人材』を送り出した伝統に過ぎず、……社会情勢に順応し立身出世コースを歩むという精神だったのである。」といわれるが、広高同窓生の中にもいろんな人がいて戦前戦中は勿論、戦後に於ても苦難の道を各界で歩んできたのである。これを「伝統」であり、「精神」であるといわれるのはどうであろうか。これからも大学を

出た人達は、それぞれ各界を担う人材であり、社会情勢に順応して立身出世コースを歩むことになるであらう。

それではよき時代(受験地獄の連続を経験しなければならぬ今の若い人達は不幸である。が、旧制高校時代に於ても苦しい受験勉強をしなければならなかつたのである。)のそこで育つたわれわれの「伝統と精神」とはいかなるものであろうか。残念ながら今それを表現する力がない。われわれ同窓生のグループとの交流の中でそれを汲み取つて貰いたい。私達は総合科学部の卒業生を広高同窓会の後継者とすることについては、それを論ずることさえまだ早いと考えているし、過去二回に亘つて行われた学生との対話の中でほぼそういう結論になつたと思つている。唯、今の教育制度の中の弱点を補強しようとして生れた学部に対し、又その中で勉学する学生に対して何らかお役に立てばと思つてお手伝いしているに過ぎない。

広高批判の中でこうだと決めつけた結論が出されているが、私には何か公式に当てはめて出された数式のような感じがしてならない。私達はもっとゆとりもあり多様であると思つている。

「現在の社会・体制・大勢に含まれる矛盾・問題を自らの目と耳と頭で見出し、それを解決しようとする実践的努力」こそ最も大切なことといわれることは同感である。問題は「解決」の目標と方法であらう。それが確立され、全体から承認されなければ、単なる無責任な破壊であり、独断であり、自由のない独裁に終るであらう。

## 私にとって婦人解放とは

—西田計氏に捧ぐ—

情報行動科学コース2年 嶋田千恵子

今日もテレビに榎美沙子が登場した。「売名行為だ。」「売名して次期選挙に出るつもりではないのか。」「『中ピ連』並びに『女性を泣き寝入りさせない会』の行動は真に女性解放運動とは言えない。」等々、相変らず手厳しい意見の飛びかう中で、あの不敵な微笑を絶やさなかった彼女はさぞかし男性の女性軽蔑感を増加させたことだろう。

そもそも、存在に深く根を降ろした「女性」という概念はゲーテのファウストに「存在するものたちの母」という言葉で言い表わされ、多くの人々の知の糧になってきた。そして、ジンメルが「存在論的他者」として女性を神話論的感受性を介して描いた後、婦人解放論が横行闊歩するようになったが、それらすべてが真に婦人の為の解放論かという点と甚だ疑問である。どこもかしこも似非ものが多すぎる世の中だと思う。ところで飛翔No.3において親切にも女性に対する警告をして下さった西田さんはどうであろうか。似非フェミニストか否か。西田さんのファンの一人として、私は否の方を期待したいのだが、彼のフェミニスト振りは単なる売名行為だという巷の噂もあり、不信感が募りつつある。

しかし私は、彼の綴り方に関し、残念ながら一部を肯定せざるを得ない。つい最近私は「女性の敵は女性である。」という言葉に身にしみて感じたのである。この事は別にしても、足を引っ張る者のいる限り女性には真の解放はないし、実質的な自由・平等は永久に手中に収められないであろう。女性ももっと目を見開いて、学んで、才女になり、我々を軽視している男性社会に挑戦すべきである。こういう風を書くとおそらく、揚げ足取りの好きな人はすぐ反論したがるだろう。が、真意を解さず、表現のみにこだわるような反論なら私は受け付けない。「挑戦」という言葉が攻撃的だというなら、「貢献」という言葉を用いてもいい。(男性社会にではなく(我々女性をも含む)“社会”に。)私が言いたいのはむしろこの意味だから、この方がいいかもしれない。まとめを書くと、「榎美沙子もオヨヨと驚く、社会に貢献する女性が、真に婦人解放を勝ち取るで

あろう。」ということになる。

西田さんの文章に話をもどすと、彼の最後のパラドックスは全く、ナンセンスなものとしか言いようがない。一見巧妙に見えるこのパラドックスは、「我は男性なり」という優越感のなせる業でなくて一体何であろう。「女性が自主的に職業選択の自由を放棄している」という馬鹿げた事が存在するのなら、長い歴史のうえで、女性が婦人参政権を得るためにさえ、どれだけ多くの努力を払ってきたかをどう説明するのだろうか。もっとも、彼は自分自身で独善的と認めているのだから、あんまり責めるのは止めましょう。それに、私は今でも彼のファンなのだから。

山口昌男という、おエライ人が「女性が差別の対象になるのは、女性が存在の根底に触れている事に対する男の嫉妬と恐怖心を喚び起こすからにすぎない。」とおっしゃっている。その考え方は一理あると思うし、男性の本音を吐いたものではないかとも思う。幸いにも(?)私は情報の劣等生である故、まだまだ情報の男子の嫉妬と恐怖心など喚び起こすに至らないが、いつか、そういう女性も現われるであろうと期待している。いや、もっと楽観視すれば、もうすでに自分のまわりからそういう女性が活躍しつつあるのかもしれない。

詰まるところ、私にとって婦人解放とは、現在のところは身につまされる問題ではないにしても、今後自分自身との闘いから始まるものになるであろう。

ところで、あなたにとって婦人解放とは?